

吉田光演 ・ 保阪靖人 ・ 岡本順治 ・ 野村泰幸 ・  
小川暁夫著『現代ドイツ言語学入門：生成・認知  
・ 類型のアプローチから』，大修館書店，2001

著者	宮下 博幸
雑誌名	ドイツ文学
巻	110
号	292
ページ	294
発行年	2003-03-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/6916">http://hdl.handle.net/2297/6916</a>

吉田光演 / 保阪靖人 / 岡本順治 / 野村泰幸 / 小川暁夫 著

『現代ドイツ言語学入門  
生成・認知・類型のアプローチから』

宮 下 博 幸

本書は日本のドイツ言語学をリードする5人の研究者の共著である。本書をひもとくと、一般の言語学の入門書とは趣の異なることに気づく。入門書は通例音声学、音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論などの分野の解説から構成されるが、本書はそのような様式に沿うものではない。まずは本書の「まえがき」に耳を傾けて、その目指すところを探ってみよう。本書執筆の動機は、ドイツ語には興味深い現象が多いにも関わらず、「残念ながら、そういった関心や疑問に答えるような入門書は見あたらない」ためであるとされる。その執筆に当たっては「《ドイツ語とはこういうものだ》といった規範的立場ではなく、ドイツ語に固有の現象を他の言語の分析にも通用するような言語普遍的な立場から解説する」ことが目指され、その結果「読者の疑問のかなりの部分は消化する(ママ)」という。また「言語は人間の認知システムの反映である」ことを前提としつつ、「現代ドイツ語の多様な現象を幅広い理論的視点からとらえようと」し、「ドイツ語を知らない人でも理解できるように工夫」している点が、他書と異なる特徴だとしている。以上をまとめるなら、1) ドイツ語の興味深い現象への疑問に答える、2) ドイツ語固有の現象を言語普遍的な立場で解説する、3) 言語を認知システムの反映と見、ドイツ語を幅広い理論的視点でとらえる、4) ドイツ語を知らない人にも配慮する、ということになる。このうち最後の点についてはドイツ語の例文や術語に一貫して英訳が付され、十分な配慮がなされている。それゆえ以下ではこの点には触れず、1) から3) の公約を各章がどれだけ守っているかという点に絞って評してみたい。

第1章は「ドイツ言語学の現在」と題され、「続く各章の内容を理解するための総論」(S. 3)として書かれている。音韻論や形態論といった領域の説明が行われているのは本章のみであるため、概説的な方向も同時に目指すのであれば、その部分にもう少し紙面が割かれてもよかったかもしれない。

第2章は「ドイツ語統語論の展開」が扱われる。本章は生成文法の基本概念を、ドイツ語を材料に丁寧に解説したものといえる。さてここで上の公約に立ち戻ると、1) の

ドイツ語の興味深い現象に答えるという目標は、生成文法のテクニカルな説明が多くを占めることで多少なりとも犠牲にされているように見える。この目標を念頭に置くなり、生成文法的に興味深く説明される 2.7 のドイツ語の基本語順のようなトピックを中心に据えるのがよかったのではないかと思われる。2) については言語普遍的なモデルを目指す生成文法の視点が取られているという点で、公約を満たしている。ただし 3) の幅広い理論的視点については不十分に感じられる。この目標を満たそうとするなら、生成文法と並んで、さらに機能主義的統語論の見方も示すべきであったろう。結果として本章はドイツ語生成文法の概説としては優れているが、その他の統語論の枠組みに関心がある者には多少の失望を感じさせるものとなっている。

第 3 章の「語彙と文の意味分析」では、言葉の意味の問題が取り上げられる。まず論理学的意味論の基本概念が、イラストを交えるといった工夫により、明快に解説される。次いでドイツで盛んな語彙分解の理論がわかりやすく説明される。本章で紹介される理論的枠組みは広く応用可能と考えられるため、上の 2) の目標は果たされていると評価できる。しかし枠組みの解説が主となっているが故に、1) の興味深い現象の提示と説明はうまく行われていないように見える。この枠組みを利用し、例えば日独語の差異を考察するなら、さらに目的に沿うものになったのではないかと残念に思われる。理論的広がりに関しては、総じて論理学的意味論にとどまっている。

第 4 章は「認知言語論」が扱われる。認知的言語研究の流れにはチョムスキーに始まる「計算主義」の立場と認知言語学の「全体論」の立場があるとされ、2つのアプローチが比較紹介される。この章は「まえがき」の公約をうまく果たしている。1) についてはドイツ語の移動動詞の特徴やその構文的拡張の説明といった、ドイツ語の「興味深い現象」を扱うことで成功している。2) も言語対照の視点を取り入れることでうまくいっているし、3) の点も認知的言語研究の 2つの方向を対比させ、幅の広い見方を提供している。ただし 4.4, 4.5 の移動動詞および不変化詞動詞の解説では、それぞれがどちらの認知的言語研究の例なのかがはっきりと示されていない点が残念である。

第 5 章「ことばの獲得」では、ドイツ語の第一言語獲得の問題が扱われる。まずチョムスキーの生得仮説が紹介される。続いて幼児文法から成人文法への推移の説明として、この二つに基本的に隔たりはないとする説と、幼児文法は漸進的に発達するとする説が詳しく紹介される。二説を対比しつつ解説する手法は明快で、ドイツ人幼児の言語獲得に関する知識がうまく得られる。本章で上記 1), 2) の目標は十分達せられている。さらに生得仮説とは別の、コネクショニズムの立場と比較する形で議論が行われたなら、3) の公約により適うものとなったであろう。

第 6 章は「ドイツ語と言語類型論」と題されている。まず言語類型論とはどんな分野であるかが、その歴史とともに解説される。次いでドイツ語の移動動詞やアスペクトの類型的特点づけや地域類型論的な考察、さらに日独の類型的比較、ドイツ語の格と態の類型的特点が扱われる。この章は複数の言語の比較により、ドイツ語の興味深い現象を引き出すことに成功している。また 2) の言語普遍的な立場はこの章で一貫してとられ

ている。さらに類型論を認知システムとの関わりで考える立場に立つ点で、3)の目標も果たされている。本章は類型論的ドイツ語研究へのよい導入となっている。なお術語に関して気づいた点を付言すると、S. 193で紹介される「目的語繰上げ」は一般の理解と異なるものを指しているため、S. 94のように充当態 (applicative) として扱う方が好ましいと考えられる。

以上のように、「まえがき」に書かれた公約がすべて果たされているのは第4章と第6章のみである。このような齟齬が生じたのは、本書が公約のコンセンサスの下に書かれたのではなく、それぞれの著者が各人の得意分野への入門をまず執筆し、それをまとめたためではないかと推察される。おそらくそのために期待が完全には満たされなかったのは残念である。しかしここで著者の企図を推量するなら、ドイツで目下行われている言語学の入門的紹介を行うことを本来望んだのではないか。それが「現代ドイツ言語学入門」と題されている所以だと思われる。だとすれば最初からドイツ語研究に見られる潮流を分類し、それぞれについて入門的解説を行うという方針を全面に掲げる方法もあったのではないかと考えられる。もちろん紙面の制約や商業的な問題により、難しい点もあると予想されるが。以上のような注文はあるにせよ、本書の野心的試みはまず高く評価されるべきであろう。ドイツ言語学の現状は、これまであまりわかりやすい形で紹介されてこなかったといつてよい。本書の登場でドイツ言語学のアクチュアルなトピックスが広く紹介されることになった。これが本書の最も重要な意義であるといえよう。

各章にはコラム記事が設けられ、楽しく読める工夫がしてある。章ごとに課題や読書案内が付され、学習の便宜が図られている。全体で十ほどの誤植と思われる箇所が目にとまったが、どれも内容理解に支障をきたすものはない。また入門書の工夫として、重要な術語を太字にするとよかったかと思われる。

(大修館書店 2001 年)

河崎 靖 / クレインス フレデリック 著

『低地諸国(オランダ・ベルギー)の言語事情  
——ゲルマンとラテンの間で——』

清 水 誠

江戸時代の蘭学の伝統が明治政府によって切り捨てられて以来、日本のオランダ語研究には特筆すべき進展がほとんど見られなかった。オランダ語を正規の専攻科目として学べる高等教育機関はなく、良心的な出版社がいくつか学習書や参考書の類を刊行したにとどまった。その多くは内容的に古くなっており、唯一のモダンな辞典である講談社のオランダ語辞典も蘭英辞典の翻訳である。オランダ語圏の言語研究は言語的にもっと